



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第669号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第669号. 京大東アジアセンターニューズレター 2017, 669: 1-11

ISSUE DATE:

2017-05-08

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/225112>

RIGHT:

2017年5月8日発行 第669号

CONTENTS

「中国経済研究会」のお知らせ.....	2
第20回 アジア中古車流通研究会のお知らせ.....	3
読後雑感 小島正憲.....	4
【中国経済最新統計】.....	11

日本語 中国語 English



京都大学 経済学研究科 東アジア経済研究センター (旧上海センター)
Center for East Asian Economic Studies, Graduate School of Economics, Kyoto University

[Home](#)
[事業概要](#)
[組織構成](#)
[活動状況](#)
[最新情報](#)
[会員募集](#)
[お問い合わせ](#)




最新情報

2014.10.07 【イベント】 「中国経済研究会」のお知らせ
2014.09.11 【イベント】 アジア自動車シンポジウムのお知らせ
2014.08.12 【お知らせ】 センター協力会の解散と支援会への移行について
2014.07.14 【イベント】 第10回 アジア中古車流通研究会
2014.07.14 【イベント】 中国経済研究会 (2014年度第3回)

[more](#)

News Letter

Vol. 539
2014.10.06

最新号

バックナンバー [more](#)

研究会

シンポジウム・講演会・セミナー

学社説明会

会員募集

寄付のお願い

[アクセス](#) | [リンク集](#) | [プライバシーポリシー](#) | [サイトマップ](#)



Copyright (C) 京都大学経済学研究科「京大東アジア経済研究センター」, All Rights Reserved.

「中国経済研究会」のお知らせ

2017年度第2回(通算第64回)の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間: 2017 年 5 月 23 日(火) 16:30-18:00

場 所: 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下1階
みずほホール AB

テーマ: 「世界的経済循環における中国経済～『間(あわい)』=『公共』の視点」

報告者: 岑智偉(京都産業大学教授)

注: 本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期: 4月18日(火)、5月23日(火)、6月20日(火)、7月18日(火)

後期: 10月17日(火)、11月21日(火)、12月19日(火)、1月16日(火)

(この研究会に関するお問い合わせは劉徳強(liu@econ.kyoto-u.ac.jp)までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。)

第 20 回 アジア中古車流通研究会のお知らせ

主催：京都大学東アジア経済研究センター

後援：京都大学東アジア経済研究センター支援会

時間：2017 年 5 月 27 日(土) 13 時～16 時 30 分

場所：京都大学経済学部・みずほホール（法・経済学部東館地下 1 階）

報告

□小川 和美（太平洋協会太平洋諸島研究所所長・元太平洋諸島センター所長）
「太平洋島嶼国の社会経済の特徴ー」

□種谷 謙一（セントパーツ代表取締役社長・元矢野経済研究所）
「太平洋島嶼国における中古車解体事業へのアドバイス」

□豊島 浩二（フォーエイチクラブ代表取締役社長）
「トンガにおける中古車流通の現状と廃車問題」

研究会終了後 懇親会を行います。

なおこの研究会は京都大学東アジア経済研究センター支援会の会員のみが参加できる
クローズドな研究会です。非会員で参加希望の方は塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp まで、
支援会入会手続きをお問い合わせください。

読後雑感

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

- | | |
|-------------------------|----------------------|
| 1. 「哲学者たちの死に方」 | 2. 「晩節の励み」 |
| 3. 「死にゆく人のかたわらで」 | 4. 「今日を死ぬことで、明日を生きる」 |
| 5. 「宗教と精神科は現代の病を救えるのか？」 | |

1. 「哲学者たちの死に方」 サイモン・クリッチリー著 杉本隆久・國領佳樹共訳 河出書房新社 2009年8月20日

終活の一環として書庫の整理をしていたら、この本が出てきたので、さっそく読んでみた。私は今まで、高僧や武将、文化人などの死に際しての態度や遺偈、辞世の句などは研究してきたが、「哲学者の死に方」については、深く学んだことがなかったので、本書を興味深く読み進めた。本書で著者は、古代ギリシャの哲学者、中国の戦国時代の諸子百家、中世のキリスト教関係者、イスラム哲学者、ルネッサンス以降の宗教家・哲学者、現代の哲学者など、190人の哲学者を取り上げ、その「死に方」を描写している。

しかし私には、本書から、来るべき高齢社会の死生観を学び取ることはできなかった。訳者たちも巻末の「訳者解説」で、「本書でクリッチリーは、何を学べるのか、いかに死ぬべきか、いかに生きるべきかをあえて詳細に示すことをよしとしなかった。クリッチリーは全てを読者に託しているが、私たち自身にそれぞれの哲学の表現を、同様に生の表現を実践せよと求めているのかもしれない。それゆえ、すべては私たちにかかっているであろう。今や私たちの学び方が、あるいは私たちの生き方が、そして私たちの死に方が試されているのである」と書いており、死生観の構築については読者一人ひとりに委ねている。

クリッチリーは本書の最後で、「死は最大のタブーである。われわれはそれをまともに見ることができない。皮膚の向こう側にある骸骨を見るのが恐ろしいのだ。さまざまな世論調査が示すのは、死と向き合うことになるとき、ほとんどの人が望むのは、痛みもなく、そして言い習わしのとおり、「誰かの重荷にならず」すぐに死ぬことである。こ

の決まり文句がうちに隠しているものは、思うに、結局、子どもや愛する人に安心して自分の世話を任せることができないから、重荷にはなりたくない、ということなのだ。死の恐怖とは、弱さの怖れである。それは年老いて、老人ホームに閉じ込められ、それに戸惑う友人や、遠くに住んでいる多忙な家族に顧みられなくなることへの恐怖なのである」と書いている。

それでも哲学者たちの「死に方」は、たいへん面白かった。それらを以下に列挙しておく。なお、哲学者たちには、自殺した者や処刑、他殺された者が多い。これは高僧の死に方とは大きな違いである。

・ゼノン:ゼノンの死に方は英雄的で劇的である。彼は僭主ネアルコスを打倒する陰謀に参加したが、それが露見してとらえられてしまった。尋問中、ゼノンは何人かの仲間について僭主にだけ、いわば耳打ちで教えるといった。ネアルコスが耳を当てにくると、ゼノンは歯で僭主の耳に噛みつき、剣で刺されて死ぬまで放さなかった。

・テオプラストス:何も言い残すことはない。ただ、多くの美しいことが世間で疎んぜられているのは、評判を気にするせいだと言っておこう。というのも、われわれは生きることを始めるや否や、もう死につつあるのだから。それゆえ、評判を気にすることほど無益なことではないのだ。ともあれ、君たちは幸運でいてくれるように。人生には役立つことよりむなしいことのほうが多い。しかし私にはもはや何をなすべきかを忠告する時間がないから、君たちのほうで、何をなすべきかをよく考え続けてほしい。

・ルクレティウス:もはや存在しない者は苦しむことはできないし、あるいは永遠の死によって死すべき命が奪われてしまえば、生まれてこなかった者と何らちがいはない。それゆえ、抑えきれない生への渴望は常にわれわれに喘ぎ声をあげさせる。寿命を延ばすことで、われわれは死の時を少しも減らしそこなわせることはできない。君がどれほど自分の生命の蓄えを何世代も足すことができたとしても、それでもなお、君には同じ永遠の死がまっているのだ。

・莊子:偉大なる地球は、体を使って、生活の苦勞を私に背負わせる。だが、年寄りになるとその苦痛を取り除いてくれ、静かに死へ至らしめてくれる。だから、もし生が良きものであれば、死もまた良きものである。死と生とは決して途絶えることのない変質である。この二つは始まったものが終わることではない。我々がひとたびこの原則を理解すれば、生と死を平等に扱うことができるだろう。

・マルクス・アウレリウス:騒ぐことも、冷淡になることもなく、毎日を最後の日であるかのように過ごすこと…そこに完璧な高潔さがあるのだ。なぜ長寿を渴望するのか？人生の目的は、理性と神靈にしたがうことであり、どんな者であれ自然がもたらすもの

を受け入れることである。このように生きることは、死を恐れないのではなく、死を蔑視することである。死とは、現在を生きることのできない人々にとってのみおそるべきものである。

・マキャヴェッリ:もし君主が民衆の扱いに長けていたら、民衆は彼のものであり、彼のために身の危険も顧みないと公言するだろう。しかしそれが続くのは危険が遠く離れたところにあるときに限る。君主自身が危険にさらされると、民衆は反旗を翻すだろう。したがって、君主は政治的統制の手段として、死の恐怖を利用しなければならない。もし君主が愛による統治を目指すならば、彼は大いに失望することになるだろう。人間は、そうすることが自分の利益となる場合、いつでも愛による結びつきを壊す。だから、必要なものは「いつでも振るうことができる罰への不安で強化した」、死の恐怖である。

・ラディカティ:ラディカティの単純な命題は、個々人は自由に自分自身の死を選択できるというものである。この死の権利は、根本的に唯物論者の自然の概念に基づいている。また、この死の権利は自殺が荣誉ある行為であり、すなわち耐え難い苦痛の状態からの正当な離脱であるというエピクロス主義者やストア哲学者の議論に影響されたものである。だがこのような考えは、キリスト教の伝統において、そしてその中でも特にアウグスティヌスやアキナスによって、異教信仰として退けられてきた。キリスト教徒にとって、生命はある与えられたものであり、すなわち所与であり、そして私たちは生命を使用する権利を持っているが、それを支配する権利は持っていない。それは神様の特権である。真のキリスト教徒は、キリスト教伝道者のように受難と闘わなければならない。

・サルトル:死? 私はそれについて考えない。それは私の生のうちに場所を持たず、つねに外部であるだろう。ある日、私の生涯は終わるだろう。だが、私は死に悩まされるのを望んでいない。私は自らの生のうちに死が入ってくることを決して望まないし、それを定義することもしない。私は生に必要であるものを常に欲しているのだ。

2.「晩節の励み」 合田周平著 三五館 2017年3月7日

副題:「“無用の努力”のススメ」 帯の言葉:「明日、死を迎えるとしても、今日から幸福になっても遅くはないのだ」

本書は、中村天風氏に師事し、還暦を過ぎてから「天風会」の理事長を務めた合田氏の著作である。したがって中村天風氏の教えが随所にちりばめられている。合田氏は、「天風哲学は、ご自身がインドの山中にて実践し“悟りの境地”を獲得してきた日常性を基本として組み立てられた。与えられた課題について、誰からも教えられないことなく、自分なりに考え抜いて、それが自然界の正しい真理に合致するまで何度

も考えさせる、というのがヨガにおける基本的な修行であった」と、天風哲学を紹介している。

また合田氏は、「人はだれしも、自分の人生は自分で切り拓き、責任を持つしかないのだ。自分の健康についても同様である。残念ながら万人共通の“健康法”はない」と言い切っている。さらに「医者にかかりながら、医者よりも病の知識が多くなり、そのため心配の種が増えた人を見かけるが、金儲けの好きな医者を喜ばせるだけだ。そういう患者は、半年飲めばいい薬を1年も飲んでくれるし、1年で治る病気でも3年もかかってくれるから、医者としては結構な患者ということになる。とはいえ、“死は自然の道理である”などと納得して、死を受け入れることも不可能である。“死ぬということは、生まれる前と同じ境遇に入ること”と考えれば、死を受け入れやすくなる、というものでもない。ともかく、死ぬということは、人生においていかにも痛くつらそうな出来事で考えたくないのである。いや、受け入れられなくとも、死は何びとにも必ず訪れる天命的なものなのだ」と書いている。

最後に合田氏は、「高齢者なればこそ、未来社会のリーダーたちに社会的に“意義ある人生”とは何かを、若者にも通用するシナリオとして伝えるべきである。日本社会の発展には、高齢者の忍耐ある大らかな精神と統率力が求められている。この価値ある精神的な求心力の発揮を、政治や社会が安易な敬老精神で抑え込んでいるのが日本社会の現状である。心ある高齢者は、国民をリードして未来社会を切り拓く、次世代精神を発揮する心意気を示すときである」と書き、高齢者に檄を飛ばしている。

3. 「死にゆく人のかたわらで」 三砂ちづる著 幻冬舎 2017年3月10日

副題：「ガンの夫を、家で看取った2年2か月」

帯の言葉：「夫は、私の腕の中で、息をひきとった。悲しみはなかった。私に残ったのは、感謝と明るさだけだった」

本書は、三砂氏が夫を看取った際の体験記である。三砂氏は本書の冒頭で、「ガンの夫を家で看取った。夫はわたしの腕の中で息をひきとった。それだけがこの本を書きはじめのきっかけである。夫なのであたりまえのことだと思っていたし、夫もそれを望んでいたのもので、それを全うした。それは静かな最期であり、わたしに残ったのは感謝と明るさだけだった」と書いている。これは、私が実母を看取ったときの感覚とはかなり違うものであり、これを読むと、看取りにも個人差があるということがはっきりわかる。

三砂氏は、「ゆるぎない方針を持つ、ということは、ふりかえってみれば、実によきことであった。深刻な病気になって、とくにガンのような治療法が確立しているとまだはつきりは言えないような病気にかかる、患者と家族はどの治療法を選択すべきか、翻弄されやすい。疼痛管理、つまり、痛みの軽減はかなりできる時代に入りつつあるので、いちばんの苦しみはこの“翻弄”ではないのか、と考えたりするのである」と書いている。この考えは、私にはよくわからない。

さらに三砂氏は、「子育てには終わりが無いが、介護には終わりがある。死は永遠の別れで、たしかに悲しいものだけれど、それは永遠の和解でもある。もうこれ以上の軋轢もなければ、刃向かわれることもない。よき思い出だけが手元に残り、見送ったものには静かな励ましが残る。厳しいことだけではないのだ。子育てと介護は似ているが、ある意味、介護の方が、救いがあることも少なくないのかもしれない」と書いている。この意見にも、私は同意できない。

4. 「今日を死ぬことで、明日を生きる」 ネルケ無方著 ベスト新書 2017年4月20日

帯の言葉：「ドイツ人僧侶が伝える、日本人が知らずに、実践している禅の教え」

著者のネルケ氏はドイツ人で、兵庫県の曹洞宗・安泰寺の住職を任され、すでに13年になるという。そのネルケ氏が日本人に向けて、ネルケ氏が悟った仏教の神髄を語ったのが、本書である。本書でネルケ氏は、氏のつかんだ仏教の奥義を、わかりやすく淡々と語っている。それは、ドイツ人にしかできないような独特の仏教理解ではない。

ネルケ氏は本書の冒頭で、「私がこの本で皆さんに送りたいメッセージはごく簡単なものです。“執着はあってもいいし、なくてもいい。生きることでも悩んでもいいし、悩まなくてもいい”」と書いている。また「“今日を死ぬことで、明日を生きる”。“今日を死ぬ”という覚悟は、決してネガティブなことではありません。そうではなく、いまを楽に生きられるために必要な気づきなのです。昨日の自分を手放すことで、はじめて今日という1日を自由に生きられるのです」と書いている。

さらにネルケ氏は、「プラス思考があり、マイナス思考があり、両方があってはじめて健全なものの考え方ができるのではないかと私は思うのです。釈尊は、物事を徹底的に“マイナス”に考えた典型的な人です」と、面白い見解を示している。無理な親孝行はしなくてもよいと説き、「動物の世界でも、親は命を賭けてでも子を守りますが、

その反対はほとんどありません。親から子への愛情は大きく、子から親への愛情は比較的小さい、それはある意味、自然なことなのです」と書いている。私も同感である。

ネルケ氏は、「“終活”にしても、葬式も、お墓も、戒名も、すべて自分で決めるわけですが、自由に決めてもいいと思う反面、ちょっとがんばりすぎとも思います。そこまで心配しなくてもいいのではないのでしょうか。自分の死くらい、がんばらずに死なせていただいてもいいでしょう」と書いている。たしかに、僧侶のネルケ氏はこのように言わざるを得ないでしょう。私のように墓や仏壇じまいをして、葬式なしで死ぬ人が多くなれば、ネルケ氏は食いつぶされるわけですから。

5.「宗教と精神科は現代の病を救えるのか？」 島田裕巳・和田秀樹対談 ベスト新書 2017年3月20日

帯の言葉：「なぜ、どうして“あの人”は信じたのか？」

本書は宗教学者の島田裕巳氏と心理学者の和田秀樹氏の対談集である。そこそこ面白い。和田氏は、「かつて土居武郎先生は、“精神分析だって宗教みたいなものだ”というようなことをおっしゃっていました。さらに、“ヨーロッパの人たちは一見科学的に見える心の理論が欲しかったので、この手の宗教が流行ったのだろう”とも話されていた。僕はそれが正しい見方だと思っています」、「結局、経済学でも心理学でも学問的に見せるか見せないかということが重要なわけで、本当に当たるかは二の次になっている。いっていることはある種の信念体系だと思うんです」、「結局人間はなにかしら本当らしく見えることが必要で、それがかつては宗教であり、絶対神がいれば本当に見え、その神がいうことは真実なわけですから」と話している。私もこの主張に同感である。

島田氏は、「私も期間は短いですが、一時期“ヤマギシ会”にいました。すぐに辞めましたが、それじゃあヤマギシ会の影響が今の私にまったくないのかというと、そういうことはない。一回出来あがったものというか、とくに20歳くらいのころは、人格形成をするうえで、そういうものの影響をすごく受けるわけです。ですからヤマギシ会を辞めたことや、統一教会を辞めてきたとしても、受けた影響は変わらないわけですから、そこまですべてが否定されてしまうと困ると思います。間違った宗教だから、それに関わっていた期間はすべて無意味だと決めつけられたら、それでその人間の人生は否定されてしまうわけで、それが正しいかどうかを館変えるべき問題だと思います」と話している。ここで私は、島田氏が一時期ヤマギシ会に所属していたことを始めて知った。このことが後年、島田氏がオウム真理教を擁護するような発言をする原体験になっていたのだろう。私も、20代に共産主義の洗礼を受けたので、それがその後の人生に大きな影響を与えるということはよく理解できる。

和田氏は、「いずれにせよ、日本もお金より名誉、お金より知性が尊敬される“日本教”を再建しないと、再生は難しい」と言い切り、「生涯納税額が5億円以上になれば、勲7等、10億円以上ならそれ以上の勲章を与えるということになれば、脱税の調査がいらなくなります。そして10兆円くらいはすぐに税収を増やすことができます」と話している。私もこの主張には、大賛成である。

島田氏は、「年齢について、若いときのほうが可能性があるかのごとくいろいろいわれています。でも、現実にと考えるとそうじゃないですよ。年をとらないとできないことのほうが、じつはたくさんある。順番を踏んでいかないとそこまで行けないわけです」、「宗教や心の領域を扱っていると、年をとればとるほど価値や重みが出てきます。むしろ若いとダメ。私も宗教を本当に語るにはまだ若すぎるかもしれません。70歳、あるいは80歳になったほうがきっといいんだと思うんです」と話している。和田氏は、「いずれにしても若いうちに人生のピークが訪れてしまうのは、なかなかつらいものがあるような気がします。なぜなら、人生が長くなりすぎたからです。人生のピークは70代あたりが本当は一番幸せなパターンじゃないでしょうか」と話している。私もまったく同感である。今、私は子育ても両親の介護も終わり、会社経営からも卒業でき、人生のすべてのしがらみから解放され、まさに、人生を全面開花させる時期に到達したのである。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
2015 年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12 月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016 年												
1 月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2 月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3 月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4 月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5 月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6 月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7 月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9
8 月		6.3	10.6	1.3	8.2	520	-3.2	1.4	13.2	0.5	11.4	13.0
9 月	6.7	6.1	10.7	1.9	9.0	420	-10.2	-1.9	27.9	-3.6	11.5	13.0
10 月		6.1	10.0	2.1	8.8	488	-7.4	-1.3	-36.9	0.4	11.6	13.1
11 月		6.2	10.8	2.3	8.8	442	-1.5	4.6	-32.4	-4.6	11.4	13.1
12 月	6.8	6.0	10.9	2.1	6.5	407	-6.4	2.6	21.1	-627.7	11.3	13.5
1 月				2.5	16.1	513	3.1	15.4	5.4	-6.2	11.3	12.6
2 月				0.8		-91	-4.8	38.1	33.3	-242.1	11.1	13.0
3 月	6.9	7.6	10.9	0.9	9.5	239	12.3	19.6	-1.4	1.6	10.6	12.4

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。